

文が発表されるほどの大きなものとなり、一九五五年六月に作家出版社編集部編『紅樓夢問題討論集』全四巻（同出版社）が、同時に出版されることとなつた。

周作人ほか『現代支那文学全集 文芸論集』（吉村永吉ほか訳、一九四〇、東成社）収録の邦訳論文や、目加田誠「愈平伯氏会見記」（『中国文学月報』一九三五年）、竹内好「旅日記抄（二）」（『中国文学』一九四二・七）といった文献も確認されるため、愈平伯の名は、

中国現代文学に興味をもつ者なら論争以前からすでに親しみがあつた。しかし、専門家にしか知られていないなかつた文名は、中華人民共和国の論壇状況の受容を通じて日本の知識人、ひいては文学に興味をもつ一般の人々にまで知られることになつたのである。

日本の研究者が、愈平伯批判の意見に夢中になる一方で、中国のアカデミズムにおけるイデオロギー批判の広がりに対する疑惑もまた、当時表明されていた。『紅樓夢』論争と同時期に行われつゝあつた知識人の思想改造は、その苛烈さが日本でも問題となつており、愈平伯批判もまたその動向の一部ではないかと目されたのである。児童文学者・謝冰心との対談「新中國の作家生活」（『世界』一九五五年一〇）で奥野信太郎は当該の論争を話題にしつつ、それを「胡風が反革命的作家として立場を問われた、いわゆる胡風批判と結びつけている」。最初胡風は純粹の文芸問題から批判されていたのが、だんだん問題が移つて、

「バイ問題に発展して來た」。奥野は文芸論争と知識人の思想改造とが、共産党体制においては地続きの問題であるとしたうえで、論壇のあり方に疑義を呈し、愈平伯批判が同様の事態に陥つてはいないかを問うた。この疑義は謝冰心によつて即座に訂正されるが、『紅樓夢』論争は中国のいき方を支持するものとしてだけ受容されたわけではなかつたのである。

『紅樓夢』論争については先行研究もある。たとえば、丸山昇は『紅樓夢』研究批判（『文化大革命に到る道』二〇〇一、岩波書店）の中で、「そもそも一八世紀の中国で書かれた、作家主体の意識も違う作品に、文芸復興、市民革命等々数世紀にわたる近代欧米文学の歴史の中から生まれた「リアリズム」概念を適用することができるのか、できるとしても、そこからはみ出るもの、あるいはその言葉で覆うことによつて視野から落ちるもののがないかどうか、といった大きな問題があるはずなのに、それはほとんど意識されていなかつた」と、愈平伯に対する批判の公式主義を非難している。

大規模ゆえに概観さえ難しい論争の急所が端的にまとめられた先行論は、貴重なものだ。ただし、丸山の研究は論争そのものについて考察しており、日本においてそれがどのように受容されたかを明らかにするものではない。時期からいつてこの論争は、中国共産党が行つた文化政策のもつとも早いものであり、日本の知識人たちにとつて大きな関心事となつた。その関心のありようの検討は、戦後日本における中国文学研究者の態度を測るうえで重要なはずである。本論では、『紅樓夢』論争を日

本において紹介・受容した言説の検討を通じて、戦後日本における中国の文芸動向を受容する枠組を素描してみたい。

2 『紅樓夢』論争の発生と展開

そもそも『紅樓夢』とは、『石頭記』という原題をもつ清代期成立の口語体小説で、全一二〇回の長さを誇る。前八〇回（オションエイティ）

兪平伯の古典解釈は中国古典の代表作「金瓶梅」を踏まえて論が組み立てられていることから分かるように、典拠論的な性格を有している。「紅樓夢簡論」は文学エリートの家系で育った文人の素養に支えられた、実証的なものであった。しかし、その結果至つた結論に、「社会主義リアリズム」が批判の対象とする術語、「観念」が用いられたことが災いしたのだろう。⁽⁴⁾ 李希凡らは兪平伯の論をつぎのように批判している。

とから分かるように、批判の対象となつたのは雑誌『新建設』一九五四年三月号に俞平伯が発表した論文であった。俞平伯は共産黨の理論誌において、自説を改めて述べたのだが、その文獻が批判されたのだ。「如紅樓夢主要觀念「色」「空」（色は色欲之色非仏家五蘊之色）明従金瓶梅來」（紅樓夢の主要な觀念は明の時代の金瓶梅よりもたらされている「色」や「空」（色は仏家五蘊の色ではなく色欲の色である）という觀念のようだ」と述べる俞平伯は、『紅樓夢』の主題を人生をとり巻く觀念、性欲や

無常さに還元する。

紅樓夢不是「色」「空」觀念的具体化，而是活生生的現
實人生的悲劇。人們通過作者筆下的主人公的悲劇命運所獲得
的教育不是墮入命定論的深淵，而是激發起對於封建統治
者及其全部制度的深刻的憎恨，對於肯定人物宝玉黛玉的熱
烈同情。所以把紅樓夢解釈為「色」「空」觀念的表現，就
是否認其為現實主義的作品。

李希凡、藍翎「關於『紅樓夢簡論』及其他」
《文芸報》一九五四·九·三〇)

紅樓夢は「色」や「空」という観念の具体化ではなく、人々が現実の人生の悲劇にほかならない。人々が作者の筆を通して学びるのは、宿命論にしたがつて深淵に落ちていくことではなく、封建的な統治者およびその全制度に対しての嫌悪や、宝玉・黛玉への熱烈な同情である。紅樓夢を「色」や「空」という観念と解釈することは、それがリア

リズムの作品であることを、まさしく否認することになつてしまふのだ。

李希凡、藍翎『紅樓夢簡論』そのほかについて』

『文芸報』一九五四・九・三〇)

李希凡と藍翎は、宫廷社会が腐敗し、終焉に向かう過程が示される「現実主義」「リアリズム」を作品に読みとる立場から、『紅樓夢』の主題が「観念」であることを否定する。この批評の枠組が、毛沢東^(マオザードン)が一九四二年五月に行つた「延安の文芸座談会での講話」に基づいていることは明らかだ。「われわれは社会主義レアリズムを主張する」とあるように、この講話ではレアリズム、つまり現実主義が価値のある創作、あるいは批評理論として提出された。⁽⁵⁾郭沫若^(クオモルオ)が芸術工作者第二次代表大会開会の辞で「毛主席の『延安文芸座談会における講話』が発表されてから、われわれの文学・芸術活動は明確な社会主義リアリズムの基本的方向をもつようになつた」と述べているように、体制確立以後影響力を増した講話は一九五〇年代半ば、古典解釈をめぐる研究の領域にも影響を与えることになった。

断つておけば、五四運動や日中戦争、国共内戦期を生き抜いた文人である俞平伯は、「紅樓夢簡論」において自身の過去の古典読解を、ただ単に再論したわけではない。『新建設』が体制変更後の理論誌であることを踏まえ、『紅樓夢』が貴族階級の没落を表現した読み物である点にも言及している。その論文

は共産党体制下で自身の意見を公にしていくことに十分意識的であつたといつていい。しかし、その老成した書き方をもつてしても、勇み足の青年たちの批判の矛先が自身に向くことを防ぎきれなかつた。俞平伯は実証主義に閉じこもる書き手では決してなく、むしろ自らの當為に極めて自覺的な文学者であつたのだが、彼が想像する以上に既成の研究を批判する向きは、強まつていたのである。

この論文は党の機関理論誌である『文芸報』に転載されたことで、同様の批判が大量生産された。たとえば、毛星^(マオシン)「評俞平伯先生の「色空」説」(『俞平伯先生の「色空」説を評す』、『人民文学』一九五五・二)は、「如果要說「色空」觀念，那麼這種悲觀嘆息，這種人生夢幻的說法，就可以說是「色空」觀念的成分。但所有這些，在全書佔的地位是很不動要的，絕不能把它加以誇大」(「もしも「色空」という觀念を説くことが必要なら、悲嘆や嘆息、人生が夢のようなものであることがそれを説明する要素となる。ただし、これらは些細なことであり、本書全体の中ではあまり重要なことは言えない。誇張して表現してはならない」と、李希凡らとほぼ同様の論旨を展開している)。

毛星のような批判が続出した結果、俞平伯は、「堅決与反動的胡適思想劃清界限」(きつぱりと反動的な胡適の思想とけじめをつける)、『文芸報』一九五五・三・一五)という自己批判論文を発表し、「我不但錯認了『紅樓夢』的客觀效果，即對我自己研究『紅樓夢』的作品所發生的効果也非常麻痺」(私は誤つて『紅樓夢』

の客観的な効果を認めなかつたばかりではなく、自分の研究がもたらした効果について鈍感であった」と、自身の立場を否認するに至つた。愈平伯が感じていた圧力の大きさは、自己批判が「客觀」というマルクス主義批評の用語によつてなされる点はもちろん、明末文学者の文体模倣でならした文学者一流の、曖昧な調子が完全に放棄されているところにも看取できるだろう。

李希凡と藍翎の論が、党の基本方針に沿つてゐることは明らかである。しかしこのようない主張は戦後日本において、研究者には熱烈に歓迎され、新聞メディアからは批判的にとり上げられた。中国共産党の文芸思潮は、支持および不支持、両方の立場から紹介されていく。

3 戦後日本における論争の受容

一九五一年一二月、吉田茂首相は台湾の国民政府を正統政府と認め、中華人民共和国とは講和しないことを表明した後、「日本とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約」が発効した一九五二年四月二八日に、日華平和条約に調印した。対して中華人民共和国政府は、非軍国主義化を条件としたポツダム宣言に逆行する日本の動きを警戒し、一九五〇年一月、「中華人民共和国とソビエト社会主義共和国連邦との間の友好、同盟及び相互援助に関する条約」を締結する。その第一条で、日

本帝国主義の復活と日本の再侵略があつた場合、共同して阻止することを謳い、日本は中ソ共同の仮想敵として定位された。一九五〇年代は東西の対立が国際関係において、明らかに構造化された時期だつたのである。⁽⁸⁾

しかし、こうした国際関係をアメリカによる日本占領の徹底と捉える立場から、同時期の論壇では独立国家として再出発を果たした中国を、支持する論調が広まつていく。古典評価の問題がまず表面化したのは、中国現代文学研究のバイオニア、竹内好の起こした国民文学論争においてである。⁽⁹⁾国民の拠りどころとなる民族性の構成に寄与する文学を求める傾向は、過去の文学の再評価をめぐる批評の機制を、再編することになった。⁽¹⁰⁾『紅樓夢』論争の紹介は、国民文学論の盛り上がりが耕した土壤の上に花開いていくことになる。

『紅樓夢』論争を受容する言説にはふたつの種類がある。それを支持するものと、批判するものである。まず量的に圧倒的に多い前者から確認していこう。典型的な論争の紹介としてはまず、君島久子、立間祥子、檜山久雄の連名の論文「紅樓夢論争とその展開」『北斗』一九五五・四が挙げられる。「今回の運動は、知識人の間にマルキシズムの文学觀を徹底させ、「人民のための文学」という立場に統一させることによつて、文学界に新しい発展をもたらそうとする大きな意義をもつものと見てよい」と述べるこの評論は「マルキシズムの文学觀」が「大きな意義」をもつことを前提としている。比較的若い世代の研

究者でもある君島らは、愈平伯と李希凡らのうち、後者の立場を熱烈に支持しているのである。

隣国で達成されつつある文学の大衆化への憧れが感じられる。発言は、つぎのようなものだ。

また竹内実「紅樓夢論争・その後」(『図書新聞』一九五五・二)も、愈平伯批判に可能性を読み込んでいる。ただし竹内は、李希凡と藍翎以降の文献もよく読み込んでおり、批判のバリエーションが、「市民派と封建派」に区別できるとする。「当時の市民層の勃興、資本主義的要素の成長、市民意識の高揚をどの程度にみとめるかによって、この論争が生まれている」とする竹内は、原文を精読した結果、『紅樓夢』に描かれた歴史的段階の捉え方として、封建社会の終わりと市民社会のはじまりとの、二種類の存在を認めている。批判文献の丹念な読解に支えられた成果だが、しかしそれでも『紅樓夢』のリアリズムが「社会の本質」を捉えていることへの疑いを、竹内が有しているわけではない。この紹介も、論争が積極的な価値を有することが自明とされている点においては、『北斗』のものと似る。

さらに論争は、日本の古典文学研究にまで影響を及ぼした。益田勝実の評論はその端的な例である。以下の引用は『日本文学』に掲載されているが、この雑誌を機関誌としても日本文学協会は同時期、同氏らを中心とした進歩的な文学研究者が集う集団として出発したばかりであった。⁽¹⁾ 戦争中の文学研究を反省し、新しい方法の確立を目指す日文協の雰囲気と、中華人民共和国のいき方は共振したのだろう。益田の書きぶりからは、

思想闘争といわれる紅樓夢論争は、実は学者も学生も、作家も評論家も教師も加わって、さらに広く大衆が参加しようと/or>しているような、学問をほんとうの学問にする闘争だが、学問にその本質を發揮させる国民的運動を展開しえないわが国では、源氏研究そのものにしても、宣長のものがあわれ論をやや曲解した「もののあわれ論」が依然横行し、源氏とリアリズムと何の関係があるか、主題性の発展などというものは近代文学をまねたにすぎない、というふうにその新しい到達は打ち消されようとすることが少くない。

益田勝実「紅樓夢論争と源氏物語研究」
『日本文学』一九五五・四)

益田は、学問が大衆参加の場となつていることを評価したうえで、日本の文学研究の後進性を批判する。中華人民共和国では、青年らが文学解釈を重要な問題と捉え、その解釈を積極的に更新しようとしている。対して日本の古典研究、たとえば源氏物語の読まれ方ににおいては、旧弊な解釈が批判されていない。益田の言説には、作品における宮廷社会の腐敗や市民社会の勃興という積極的な主題を読みとらない源氏研究を遅れたものとし、論争における批判を論壇のありようとして理想化する機制が看

取られる。^{〔2〕}論争が大衆同士、対等に議論できる関係のうえに成り立つており、問題が持ち上がったとしても、対話を通じて解決できる。そういうた、楽観的とも受けとれる中華人民共和国観に益田は支えられている。

青年層が論争に参加し、民主的な言論空間が成立しつつあることを支持する言説は、このほかにも、今村与志雄「紅樓夢研究の動向」『世界文学』第四号、一九五五、刊行月不明)、魚返善雄「海外ニュース 中国」『出版ニュース』一九五五・一・一二)、竹内実「紅樓夢」をめぐる思想改造」『中国経済年報』第九集、一九五五・二)、本郷賀一「紅樓夢」をめぐる思想闘争」『世界週報』一九五五・三・一二)、今村与志雄「紅樓夢」論争について」『文学』一九五五・五)、武田泰淳「古典の再評価」『文芸』一九五五・七)など、数多く確認される。

ただし、思想闘争を非難する言説もある。「ヤリ玉にあがつてるのは愈平伯だが、そのねらいは、古典に対する思想の統一にあるらしい」、「洗脳運動はここまで及び、学者も昔のままの『夢』をむさぼつてはいられないわけだ」と、『朝日新聞』夕刊の記事「紅樓夢」(一九五四・一二・二三)は論争を批判している。また同紙は、「紅樓夢」をめぐる思想闘争」『朝日新聞』朝刊、一九五五・一・一〇)でも、「マルクス主義思想を国民に広く普及しようとするネライを持つものであることにまちがいない」との論調を展開している。

『朝日新聞』が洗脳運動と呼んでいるのは、中華人民共和国

で開始されつつあった、知識人の思想改造のことである。知識人の思想改造は本稿の冒頭で採り上げた胡風をめぐる批判が有名だが、ほかに一九五一年末から翌年にかけて実施された三反五反運動もある。贈収賄、脱税、国家資材の横領、原料手間のごまかしなどをとり締まる名目のもと、遅れた思想をもつ知識人を改造する運動であった。^{〔3〕}『紅樓夢』論争を、中華人民共和国の体制がマルクス主義に沿わない知識人を排除した思想改造と連絡して捉える視座も、戦後日本の論壇においては、報道のうちにあつたのである。

引用してきたよううに、『紅樓夢』論争の受容をめぐつては、青年らの読解および論争姿勢を支持する立場と、支持しない立場に分かれていた。文化大革命を経て、中華人民共和国における文化・文学をめぐる議論が苛烈な権力闘争の手段として利用されたことが暴露された今日においては、論争支持の言説は中国のアカデミズムが政治動向と地続きであることを捉え損ねており、対して青年たちを批判する言説は正当なもののようにも思える。ただし、中国の体制が変更されたばかりであり、文化大革命のような時期に比べて、批判もまだ苛烈には成りきつていなかつた状況を踏まえると、日本の知識人たちのほとんどが愈平伯を批判する青年らの支持にまわつたのも、仕方なかつたと考えられる。実際、愈平伯はすぐに自己批判を行なつたことであつて、その後も人民共和国において地位を保持し続けてい

るようななかたちで、論争受容を行なつた、村松暎（一九二三～二〇〇八）という人物がいる。彼は論争の成否を問うのではなく、自らも論争に参加していくような、独自の立場から意見を展開していった。

4 村松暎の中国文学研究

一九四〇年代から五〇年代にかけての中国文学研究は、既成の漢学やシノロジーへの批判から出発した、中国文学研究会が中心にあつたといつてい。東大グループが周辺の研究者を誘い入れ結成されたこの会は、戦時下において一時的に休止状態となつたが、そこで活動した文学者らはその後、それぞれの持ち場で業績を公にしていった。特に、東京都立大学に籍を置いた竹内好のもとでは、継続的に研究者が輩出された。また、東京大学における魯迅研究会の組織や、関西でも現在にまで続く中国文艺研究会が結成され、中国文学研究の拠点となつていった。¹⁴⁾

村松はこのような潮流からは離れた場所、慶應大学に籍を置いていた。上海を愛した梢風の息子である暎は、白話小説に興味を集中させ、新たに組織された中国研究の動向には組しなかつた。慶應大学を退任する際の記念論集に寄せられた村松暎「定年に当つての感慨」（『芸文研究』一九八九・三）では、彼が中国文学研究をはじめたらあらましが振り返られている。慶應中等

部の教員をしていた村松は、大学部の教員として赴任した奥野信太郎の指名によって助手となる。村松が自らの文艺観について、「異端」や「我流」という言葉を用いているように、影響力のある研究会から離れた場所で、一人研究を開始していったのである。

ただし、彼は現代中国の動向に無関心ではなかつた。『毛沢東の焦慮と孤独』（一九六七、中央公論社）や、『中国三千年の体質』（一九八〇、高木書房）など、共産党体制を論じた成果を着実に発表したように、村松は現代の状況にも強い関心をもつ研究者だつた。¹⁵⁾

彼が研究者としての最初期に行なつた仕事に、宋代の通俗的な短編小説の翻訳である『杭州綺譚』（一九五一、酣燈社）がある。¹⁶⁾この著作の「解題」において、村松は「中国の思想は大体において実用といふことが重んぜられており、處世の法については千万言を費してゐるにもかかはらず、その奥に横たはる人間性の問題の如き直接役に立たぬことについては殆ど触れてゐない」と述べている。村松は、中国における文学が現実反映的な観点から読まれることで、個別の人間が抱える心情などがよく検討されないことを問題視していた。彼が直接に批判しているのは、明清期における文学に社会的実用性を読み込む読解コードである。ただし、そのような読解コードが、体制変更後の中国においても回帰することを、「それが新しい形で現れて来る危険性も十分に考へられる」と、村松は予示している。

実を規定するイデオロギーを踏まえた読解コードが、イデオロギーの命題を変えながら連続していく可能性を、村松は指摘するのである。イデオロギーを投影する読み方を退ける村松は、自身の読解において小説の創作的要素を積極的な価値として析出するという書き方を採っている。そのことは、村松がまとまつた意見を提出した「紅樓夢の小説性」(『芸文研究』一九五五・二)から窺える。この論文は、周汝昌^{チヨウルウチャウ}という紅学の徒が一九五三年、棠棣出版社より刊行した研究書、『紅樓夢新証』への反駁として書かれている。周汝昌は、俞平伯に似た立場の実証的研究者で、作品の注釈書に記されている解説を手がかりに、『紅樓夢』が作者の自伝であることを論証しようとする。この著作に対し村松は、批語と作品とのずれに注目する。たとえば、周汝昌は賈家と曹家の相同性を強調するのに対し、村松は賈家と比較して曹家の富がその何分の一かであつたことに光を当てる。周汝昌は『紅樓夢』を自伝的小説として読解しようとするのだが、むしろ自伝からずれる要素の多い小説であることが証明されると、村松は指摘するのである。

「紅樓夢の小説性」は先行論のあげ足とりのようであるが、よく読むと村松の『紅樓夢』に対する評価軸が分かる。「曹雪芹は単なるレアリストであつたのではな」く、「小説のなかで自分たち「曹雪芹と死んだその恋人——引用者注」を結びつけようとしてたロマンティストでもあつた」。村松は、『紅樓夢』が作者の実人生を核に虚構の創作が試みられた、中国文学史上、貴重な作品として評価しているのである。「天上の世界から、互いに恋すべく運命づけられて、またその恋は遂げられずに終るべく運命づけられて降ろされた」と評価する村松は、作品の創作的な部分を前景化して読もうとする。村松は『紅樓夢』を、「小説性」を有した作品として価値づけるのである。^[17]

「紅樓夢の小説性」を公にしたことから分かるように、村松は慶應大学に赴任後、『紅樓夢』に興味を集中させていた。先に引用した、「定年に当つての感慨」でも、「紅樓夢論争が起つたのは、私が『紅樓夢』に耽溺しているころ」とある。村松にとつては研究者としての出発期にあたる一九五〇年代半ばに、『紅樓夢』論争が発生したのだ。すでに自身による『紅樓夢』評価を確立させつゝあつた村松は、『紅樓夢』論争を受容するにあたつて、俞平伯と李希凡らどちらかを支持するのではなく、創作性の読みとりという観点から、両者の意見の部分的な評価を行いつつ、自身の意見を論争中の意見に併記していく文献『紅樓夢論争に対する批判』(『芸文研究』一九五五・一一)を公にした。この文献の中で、「革命につきものの行過ぎも部分的にあつたが、それも時の経つにつれて、それなりの落着きを見せてきている。だからといつて、(中略)中国で行われている紅樓夢の解釈を、無批判にそつくりそのまま頂戴しなければならない義理合いは私どもにはないのである」という村松は、俞平伯批判を認めつつも、李希凡らの意見にも組する」ことがない。まず、

李希凡らに対して村松は、「宝玉の反封建闘争の意義を強調するというのは明らかにいきすぎである」と述べ、「彼は女子を相手に勝手に熱を吹く以外にはこれといったことは一つもしてない」と、マルクス主義的読解の根拠不足を述べる。賈宝玉は、「『闘争』などといえるような積極的な行動のできる男ではない」のだ。

李希凡らによる俞平伯批判が部分的に支持されているところもないではないが、基本的に村松はマルクス主義批評の性急さを再検討しようとしている。村松は、論争において優勢であった李希凡らの意見に修正点を多く見出すことによって、『紅樓夢』解釈を片づいたものとせず、いまだ検討を要する議題であることを読者に印象づけているのである。さらに村松は、俞平伯や李希凡らの意見、そのどちらでもない三番目の意見として、自らの作品読解を併記することも行なっている。たとえばつぎの箇所では、作品の主題を説明した部分として頻繁にとり挙げられた色空説について、独自の解釈が開陳されている。

現実世界は仮のものであり、天上世界こそ真のものである色即是空的なものは、この意味で作者の唯美主義思想を支えている骨格である。これを曹雪芹は「色空」という仏教用語で表現し、俞平伯はそれをそのまま仏教的に解釈し、批判者もそのまま受けついで解釈するので、ひたすら消極的なものと見なすことになるのだが、この一見色空的

な現美否定的なものが、紅樓夢の中では美を永遠のものたらしめるという積極的な役割を果たしているのである。

俞平伯は作品中の色空という言葉を、仏教における色即是空、人生は無常であるという解釈を行なった。対して李希凡らは、俞平伯の解釈を政治的に文脈化し、貴族階級の没落として読んでみせた。両立場を踏まえ村松は、仏教的にこの語を解釈することから決別を図る。⁽¹⁸⁾ 村松は、色空を作者である曹雪芹の唯美主義的な考えが端的に表現された語として捉えることで、『紅樓夢』を創作性の高い作風として理解しようとするのだ。

5 古典解釈の弁証法

俞平伯は作品における典拠との関係や、作者の自伝的要素と対応する箇所を前景化しており、また李希凡らは主人公をとり囲む宮廷社会の状況を前景化していた。「これに対して村松は、冒頭にある神話的要素を前景化している。どこを前景化するかで、作品の解釈が変更されるのは当然といえば当然だが、重要なのは論争を受容した村松が、論争における二様の意見と、異なる自らの意見を併記している点である。俞平伯と李希凡らの意見は、どちらもが支持されないかたちで整理され、論争が係争中である印象を読者に与えていたが、さらに村松は自身の作品解釈を示し、解釈の複数性を示してみせたのである。

もちろん、創作性を重要視する自身の立場を軸として書かれている以上、村松の意見が説得力を持つているようにも読め、三者の意見は平等に扱われているとは言い難い。ただ、自分の意見を唯一の読解ではなく、今日における読解可能性のひとつとして提示する書き方は、日本においてしかも我流で中国文学を読んできた自らの解釈を論争空間に繰り込もうとする、村松の一風変わった態度として理解できるだろう。

自覚的なものではないだろうが、村松の独特的言説は、台湾出身の理論家である陳光興^{チヤングアーチン}が、中国を対象として研究を行う際の態度として定式化した、「弁証法」と呼ぶ方法だと捉えられる。陳光興は、溝口雄三という研究者の議論を踏まえ、つぎのように述べている。

私の理解で言うと、溝口が意図したのは、内在的に中国を理解するだけでなく、そのためにこそ内在的にそれを超越し、さらにお互いの相対化を通じ、また客体化を媒介的プロセスとして、「中国」と「日本」についてこれまでと異なる理解に達することである。すなわち、ナルシシックなBeingではなく、相互転化へと解放されたBecomingである。

陳光興「アジアを方法とする」（丸川哲史訳『脱帝国』

一一〇一一、以文社）

陳光興は、中国について研究を行うと、それがすなわち日本

国内の状況へと文脈化され、対象を軽視した中国理解となつてしまふ危険性を、溝口の評論から読みとつて。それは単に希望する日本社会を、中国を媒介にしつつ述べた記述に過ぎない。本稿の文脈にこの知見を転用すれば、『紅樓夢』論争を理想的なものとして支持する立場から紹介する言説と、思想改造として不支持の立場から紹介する言説は、日本を中国化するかあるいは中国化しないかという点を争つてている点で、非弁証法的な記述に陥つてしまつてゐると考えられる。論争受容の二様の言説は、中国に関心を払つてゐるようでいて、隣国で示された状況に対し局外から判断を下すだけの、凡庸な意見にほかならない。

これに対し、村松は『紅樓夢』論争で示された解釈に対し、自らの解釈を併記するという方法で受容文献を書いている。

これは、中国の文芸解釈の是非を問うのではなく、中国の古典解釈に自らの解釈を併記し、そこに止揚の可能性を胚胎させることで、さらなる高次の意見が生産される契機を生み出す結果をもたらすだろう。他の受容文献において論争は、支持か不支持かという非生産的な判断がなされるだけであつたが、村松は自らの解釈を踏まえたうえで論争に参加するような態度をとつたのである。

重要なのは、日本の学者によつて論争が係争中のものとして捉えられ、そのうえで中国の古典解釈と日本の古典解釈による弁証法の契機が、論争空間に埋め込まれたことである。この手

続きによつて、『紅樓夢』解釈は単に中国だけのものではなく、日本も含めた東アジア規模で争わることになり、そこには論争を係争中の動態として留める道が開かれる。もちろん、そこまで大きなねりを生むことはできなかつたが、しかし彼が受容する際にとつてみせた振る舞いは、議論を開いていく可能性を有していたのではないだろうか。

そして、古典解釈の弁証法は、興味深いことに現実的なレベルでも実践されている。村松は、「紅樓夢論争に対する批判」を公にした直後に中国へと渡り、愈平伯や李希凡らに、自らの『紅樓夢』読解を開陳し論戦をもちかけたのである。その顛末は、「中国で会つた人たち」(『文庫』一九五六・一二)で報告されている。著名な文学者でもある郭沫若に歓待された村松は、彼が招待してくれた宴席で愈平伯と会つた。白くなつてしまつた頭をイガ栗に刈つた小柄なお爺さんで、ひどい南方訛りがあるという印象を残しており、最高の教養を有する大家をやや皮肉つてゐるが、これは村松の忌憚ない性格がじみ出た記述なのだろう。

対話はといふと、村松が『紅樓夢』を調べている」と言うと、そのことを知らなかつた愈平伯が「紅樓夢問題を知つてゐるか」と返答し、それに対して村松が「はじめから非常に興味深く見ていた」と答えると、「君はどう思う」とあちらから聴いてきた。これを受け村松が、「わたくしは先生の意見には反対です」がしかし、先生に対する批判者の意見とも違います」と言うと、愈平伯は「そうか、そうなけりやいかん」と答え、「わたしの研

究は趣味でやつていたので、どうも研究と言えるようなものではない。君にも教えてもらわなければならないが、書いたものがあつたら是非くれないか」と対応をしてみせた。

大規模な批判がされたとはい、年齢、文名、語学および文學のリテラシー、どれをとつても圧倒的な愈平伯からそう言われた村松は、「恐縮を通りこして、いささか返答に窮してしま」う。愈平伯が創作者から研究者になつたのは、おそらくその創作に含まれる批判性が時代とあつれきを起こすようになつたことが主要な理由のため、趣味でやつていたわけではない。しかし、腰の低すぎる余り卑屈な印象さえある態度で接した愈平伯と村松の間には、それ以上の意見交換がなかつたとしても、対話の回路が設置されかけていたのである。

また、村松の噂を聴きつけ、今度は李希凡と藍翎が來訪する。村松は文章を通じて、「さぞ氣の荒い、人を眼中におかぬといった、血氣盛な連中」と予想していたが、実際に会つてみると彼らは、学生と話をしているような気さえするほど朴訥とした雰囲気の青年たちであつた。村松が挨拶すると彼らは開口一番、「自分たちのやつたことは、とても研究などといえるようなものではな」く、「愈平伯先生などには及びもつかない」ので、「自分たちは愈先生が紅樓夢の研究を続けているのを喜んでいる」と述べ、その腰の低さに村松は驚く。

村松は政治的な解釈を声高に主張してくることを予想し、「ヨロイカブトに身をかためた」ような心境で接していたことを反

省しその後、「一時間近く、時の経つのも忘れて、大いに話しあつてしま」う。ここでは、中国と日本の研究者の間に建設的な対話が交わされたはずだ。俞平伯にしろ、李希凡と藍翎にしろ、事前の予想はよい意味ではされたのである。

『紅樓夢』論争の当事者との面会について述べられる「中国で会つた人たち」からは、村松が中国で議論される古典解釈とは異なる解釈を踏まえたうえで相手と接していることと、その態度が生産的な対話の手がかりとなつてることが読みとれる。村松が意図的にそのような戦略をとつたとは考えにくいが、彼の態度をそのように評価することも可能だ。

そして、村松の意見は注目され、中国共産黨の機關文芸誌に論文を発表する機会が与えられる。村松映「我對『紅樓夢』二三問題的看法」（劉仲平訳「私の『紅樓夢』に対する二三の点についての見解」、『人民文学』一九五七・二）が公にされたのである。村松はここで、「研究古典文学作品、必須注意的是這些作品常常帶有複雜的相互矛盾的因素。（中略）如果不特別注意這点、就會有陷于片面的解釈的危險」、「古典文学作品の研究は、作品はいつも複雜で相互に矛盾する要素をもつてゐることに注意しなければならない。（中略）もしこの点に特別な注意を払わなければ、片面だけを解釈する危険に陥つてしまふ」と述べている。

ここで述べられるのは、「紅樓夢の小說性」で公にした意見のうち、マルクス主義的な読解に対する批判を強調したものとなつてゐる。末尾、「由于处在旅行当中、準備很不充分」（旅行

の最中という）ともあつて、準備が不充分であり」とあることから、この評論は村松が中国滯在中に執筆したものが、『人民文学』に掲載されたものである。村松は日本人でおそらく唯一論争に参加し、『人民文学』という場に李希凡らへの批判を公にすることと、論争を多義的な議論の場へと開いていった人物であつたのである。

それでは、村松にとつて論争は、何をもたらしたのか。陳光興が「相互転化」と解放された *Becoming* と述べる点を重く受けとるなら、論争に参加することで村松がどのような存在になつた (*Becoming*) のかを考察した方がよいだろう。前節で引用した「定年に当つての感慨」では、論争が自らに与えた影響を、少しではあるが村松自身が語つている。村松の中国滯在中、語学の学習相手として、週に二三回、若手の文学理論家が、宿舎に来てくれたとある。そのとき、村松が「あなた方はあの魅力的な紅樓夢を、そんなに固苦しく面白くなく読むのか」と尋ねると、その理論家は「いや、読む時には違う」と答えたらしい。この返事に対して村松は、「これは中国文学を考える場合の大きなカギを私に与えてくれた」と述べている。村松は、マルクス主義的な読解が鑑賞の次元ではなく、あくまでも論争に参加し、自身の政治的立場を固める目的で行われていることを知るのである。

「定年に当つての感慨」は回顧であるため、割り引いて受け止めなければならないものの、『紅樓夢』論争を経て、村松は

個々の批評よりも、批評が提出される中国人の気質へと興味を差し向けていったようである。たとえば、その後に書かれた「中國人の性格」『中國三千年の體質』（一九八〇、高木書房）では、「彼等は統制された社会の住人である。内心はどうあれ、政府の方針に従う。あるいは従うふりをする」と中国人の気質が論じられるが、こうした認識は論争に参加した結果、獲得されたものだらう。この意見が斬新な意見であるのかはさらなる検討が必要だが、重要なのは、論争が村松自身にも影響を与えたことである。論争は村松にとって、中国観を確立していくひとつの契機になつたのである。

一九二三年生であり、一九五〇年に慶應大学の学部を卒業したばかりで教職についた村松は、世代的に李希凡と藍翎とほぼ変わらない。明治末年生である武田泰淳や竹内好のような中国文学研究会の主要メンバーと比較しても、村松の若さは際立つてゐる。李希凡と藍翎といった、同世代の青年が発表した革新的な論調を、思慮深い態度で受容した村松は、相當に珍しい資質を有した文学者であつたと言える。

ちなみに、本稿で参照した理論家の陳光興は、その体系を竹内好の言説読解から組み上げている。今日において、中華圏や日本において、中国文学者として竹内の論の有していたアクチュアリティは高く評価されている。竹内の理論が、単独講和による比喩的な占領状態が連続する日本や、あるいは大陸による同一化の圧力にさらされている台湾において、独立を希求す

る人々に大きな手がかりを与えていることは間違いない。ただし、竹内が華々しく論戦を展開したすぐ後の時期、村松もまた目立たないようななかたちで、中国と対していった。

『紅樓夢』論争が、中国共産党の方針のもとで作り出された議論であることは、批判論文が党肝いりの新聞雑誌に掲載されていることから、間違いない。ただし、日本でも苛烈な知識人の批判が問題視された文化大革命とは異なつて、愈平伯はページされたわけではなく、その後も大学の教員であり続けた。そのため、議論は政治的に生み出されたものであつたにもかかわらず、当時としてはそのことが分かりにくくなつた。

本論で詳細に論じることはなかつたが、たとえば武田泰淳という作家は、創作的エッセイ「渺茫たるニ氏」『中国文学』（一九四七・九）を発表するほど愈平伯文学に親しんでいた。しかし、そのような作家であつても、評論「古典の再評価」（『文芸』一九五五・七）や、小説「うつし絵」（『改造』一九五五・一）を通じて、愈平伯ではなく進歩的な青年らを支持し、間接的に共産党のイデオロギーを下支えしてしまったのである。

こうした言説とは違つて、村松の体系的でないかたちで提出された一風変わつた批判は、中国に対してどう接していくかの、ひとつの手がかりになるだろう。論争に對して判断を下すのではなく、自らも議論に参加することで議論を動態とし、さらに中国を通じて自らの意見自体を生成していく。そうした道の開

き方がある」と、彼が提出した『紅樓夢』論争に対する言説を通じて気づくことができる。ある。

注

(6) 郭沫若

（1）正確には、山東大学の紀要である『文史哲』一九五四年九月号に掲載された当該の論文が、『文芸報』一九五四年九月三〇日号に転載されたことが発端となつて論争が巻き起つた。この転載版には、「挹它転載在這裏，希望引起大家討論，使我們對『紅樓夢』這部偉大傑作有更深刻和更正確的了解」〔それをここに転載することで、みなが討論を引き起こし、「紅樓夢」この偉大な傑作をわたしたちにとってより深くより正確に理解することを希望する〕という言葉が付されており、雑誌編者によつて積極的に方向づけられていた論争の性格を知ることができる。

（2）胡風批判については李輝（リーホイ）「風雲の秋」（千野拓政ほか訳『囚われた文学者たち』上巻、一九九六、岩波書店）や、小山三郎「中国共産党の文芸政策と一九五五年の胡風事件」（『中国近現代作家の政治』二〇一六、晃洋書房）に詳しい。

（3）『紅樓夢』の書誌や梗概については、松枝茂夫「解説」（『紅樓夢』（ヨウイイ）一九五五、岩波書店）を参照した。

（4）周揚（チヨウヤン）「社会主義リアリズム（II）」（『中国事情』一九五三・五）は「社会主義リアリズム」を、「作家が眞面目に、眞実に、現実を革命的發展の面において描くことを要求する」立場として定義している。

（5）千田九一訳『現段階における中国文芸の方向』（一九四六、十月書房）、鹿地亘訳『毛沢東の文芸講和』（一九五一、ハト書房）、毛沢東選集刊行会訳『毛沢東選集 第五卷』（一九五三・三一書房）など、講話は日本でも積極的に紹介された。本稿では毛沢東選集刊行会編訳を参照している。

（6）郭沫若「中国文学・芸術工作者第二回代表大会開会の辭」（同ほか、中国文学芸術研究会訳『文学・芸術の繁榮のために』一九五四、駿台社）。

（7）俞平伯の文業については、拙論「中国文人の〈隠退Passivity〉」（『阪神近代文学研究』二〇一八・五）に詳しい。なお、本稿の論述は一部、この拙論と内容的に重複するが、その論旨および結論は異なる。

（8）当時の国際情勢については、馬場公彦「中ソの「平和攻勢」に動搖する日本論壇」（一九五一—一九五五）（『戦後日本人の中国像』二〇一〇、新曜社）を参照した。

（9）一九五〇年代の国民文学論とは、米軍占領下からの独立をめぐる議論に呼応しつつ、文学創作や研究をめぐって民族性の確立が議論された言説群のことである。この論争の中心人物であった竹内好が、毛沢東に対する関心を深めたうえで議論を開始した経過については、渡邊一民「国民文学論争」（『武田泰淳と竹内好』二〇一〇、みすず書房）に詳しい。

（10）日本文学協会編『日本文学の伝統と創造』全二巻（一九五三・一九五四、岩波書店）では、『万葉集』や『源氏物語』『平家物語』など、古典文学の再評価をめぐつて討論が行われている。

(11) 日本文学協会の発足は一九四六年六月一五日。その後、注10で

引いた書籍を出したのち、一九五二年一月に現在まで続く『日本文学』が発刊された。益田の文献のほかにも、阿部知二「文化人と人間の誕生」(『日本文学』一九五五・三)が載っており、中華人民共和国の動向への注目度は高かつたことが推察される。

(12) 梅沢伊勢三「もののあはれ論の成立」(『芸術研究』一九五四・六)など、戦後の古典研究は依然として本居宣長の解釈を再検討する、既成路線をたどっていた。

(13) 三反五反運動については、座間紘一「社会主義への移行と『三反』・『五反』運動」(野沢豊編『中国革命の勝利』一九七八、東京大学出版会)を参照した。

(14) 戦後日本の中国文学研究については、代田智明「戦後近現代中國文学研究管窓」(伊藤徳也ほか編『戦後日本の中国研究と中国認識』二〇一八、風響社)を参照した。

(15) 村松の経歴については、三田英彬「村松暎」の項(小田切進ほか編『日本近代文学大事典』一九七七、講談社)を参照した。また、村松暎「定年に当つての感概」(『芸文研究』一九八九・三)には、さらに詳しい履歴や著作目録が掲載されている。

(16) 『杭州綺譚』という題をもつ物語ではなく、宋代における杭州を舞台とした小説のいくつかを集めた刊本である。なお、村松の初期の業績としてはほかに、清末の作家を論じた「李汝珍」と「女の王国」(『三田文学』一九五三・一〇)がある。なお、村松の白話小説受容を論じた先行論としては、勝山稔「近代日本に於ける中國白話小説『三言』所収篇の受容について」(『国際文化研究科論

集』二〇〇九・一二)がある。

(17) 村松はあるべき文芸として、西洋の近代文学を想定していたと考えられる。たとえば「中国人の小説観」(『毛沢東の焦慮と孤独』一九六七、中央公論社)では、「中国の近代文学は、歐米近代文学の視点からいうならば、あまり近代化されなかつたということ」になる。(中略)西洋的な近代文学の影響を受けることが少なかつたからであろう」と述べている。ここで言及される「歐米近代文学」が何を指しているのか分からぬが、文章内に坪内逍遙への言及があることから、ウイリアム・シェイクスピアをはじめとした英文学を想定していた可能性はある。

(18) 第二節で確認したように、愈平伯が述べる「色即是空」とは、仏教的なものではなく、人間の欲情を指す用語として用いられている。この点、村松は愈平伯の意見を正確に読みとつていい。

【付記】漢字は新字体に改め、ルビや参考資料の副題は適宜省略した。

引用文中の(中略)、(改行)、「(注記)」は藤原による。中國語の文献については、邦題を付し、括弧中に原題を示した後、引用文の後に「」を用いて日本語訳を付した。邦題と日本語訳も稿者自身による。なお本稿は、同志社大学国文学会研究発表会(二〇一七年一二月三日、於同志社大学)での口頭発表を経て、作成した。各席上でご指導頂いた方々に心より感謝申し上げる。